

令和2年度第2回乳幼児教育保育推進体制の充実・活用強化に関する懇談会 議事要旨

1 開催日時

令和2年12月1日（火） 午後3時00分～午後4時30分

2 開催場所

広島市役所北庁舎6階 教育委員室

3 出席者等

(1) 学識経験者・教育関係者・関係団体代表者

朝倉 淳【座長】 (安田女子大学 教育学部 児童教育学科 教授)
徳永 隆治 (安田女子大学 教育学部 児童教育学科 教授)
渡邊 英則 (認定こども園 ゆうゆうのもり幼保園 園長)
松尾 竜 (広島市私立保育園協会 理事長)
米川 晃 (広島市私立幼稚園協会 理事長)
河面 睦子 (広島市保育園長会 代表)
坂本 玲子 (広島市立幼稚園長会 会長)
安田 仁 (広島市小学校長会 代表)

(2) 事務局（広島市こども未来局・広島市教育委員会事務局）

保育企画課長、保育企画課調整担当課長、保育指導課保育園運営指導担当課長、
教育企画課長、指導第一課長、特別支援教育課長、教育センター次長

4 議題（公開）

幼保小接続の推進について

5 傍聴人の人数

0名

6 懇談会資料名

- ・ 幼保小接続の推進について（資料1）
- ・ 幼保小接続に向けた手引
- ・ 広島市教育大綱

7 出席者の発言要旨

- ・ 幼保小接続の推進について

事務局の説明に対し、以下のような意見・質問等があった。

※1 ○は学識経験者・教育関係者・関係団体代表者、●は事務局職員の発言を表す。

※2 「乳幼児教育保育アドバイザー」は「アドバイザー」と、「乳幼児教育保育支援センター」は「センター」と表記している。）

● 資料1「1 概要」～「3 現状と課題」の説明

- 幼稚園・保育園等と小学校が、互いの教育内容などについての理解が不十分であると感じている。毎年、夏休み等に小学校教員が幼稚園・保育園等の保育を見学に行くが、そうした際には、保育をしている先生たちがどのような思いで子どもと接しているかなどを話し合う場面が必要だと感じている。

- 今年度は、コロナウイルスの影響で、保育園と小学校との連携は難しかった。これまで行ってきた保育士と小学校教員が顔を合わせて子どもの育ちを語り合うことは、とても大切であると改めて感じている。今年度の保育を次年度につなげていくために、子どもの育ちを特に丁寧に小学校へ伝えていかなくてはならないと思う。
- 市立幼稚園では、コロナ禍にあっても「園へ行こう週間」を継続したり、アプローチカリキュラムを全園で共有して実践する等、小学校教育へつなぐことについてしっかり取り組んできた。その中で、明らかになった課題の解決にも取り組んでいきたい。
- 園児が入学する小学校教員に、園児一人一人の育ちの様子を具体的に伝える「幼小連絡会」を行っているが、これは、いわゆる幼保小接続とは意味合いが異なるものと思っている。幼保小接続は、子ども一人一人のことを小学校に伝えるということではなく、幼稚園全体と小学校全体をつなぐものであると思う。園長などが、地元の小学校のことだけでなく、広島市の小学校全体のことを理解した上で、保護者に対して小学校のことを伝えていかなくてはならないと感じている。
- 今年度、私立保育園で保幼小の連携推進園として小学校教員を1年間受け入れている。その園で公開保育を行った際に、参加した小学校教員から、「保育園ではただ子どもを遊ばせているだけかと思っていた。」という発言があった。保育園での遊びは学びであり、大変意義があるということを十分に発信することができていないと感じた。今後は、小学校との連携の際に、保育園や小学校が実践していることの意義を、お互いに理解できるように伝えていく必要がある。
- 幼稚園・保育園等と小学校が連携を密にしていくためには、まずは、それぞれが保育と教育の実態を知ることが大切である。その上で、子ども一人一人についてどのように情報提供を行うのが重要である。幼稚園、保育園、認定こども園が要録により個々の子どもの状況を小学校へ伝えるという仕組みをしっかりと活用して、書類を交わすということが重要ではないか。
- 幼稚園、保育園、小学校等が、それぞれ、発達の段階に応じたカリキュラムをどのように作成し、実践を計画しているのか、一人一人がその中でどう育っているのかをしっかりと知ることが大切である。
- 幼保小接続と幼保小連携とは違う。幼保小接続では、幼児期の教育が小学校教育とどう接続するかが大切である。組織同士で連携するというだけでなく、幼児期の子どもの育ちが、小学校にきちんと受け止められるようなシステムをどう作っていくのが大切だと思う。

学習指導要領、幼稚園教育要領、保育所保育指針などが改訂（改定）されて、子どもの育ちの見方を変えようという流れになっている。コロナ禍で世の中が大きく変化している中で、どのように子どもを育てていけばよいのか等、これまでと違う状況についても議論する必要がある。その中で、主体性を持って課題や問題を乗り越えようと取り組むことができる子どもをどう育てていくかということは、幼稚園、保育園、小学校、中学校、高等学校、さらには社会人でも同様に考えなくてはならない。コロナ禍では、今までとは違う工夫をしなくてはならないことがあり、現場は大変である。ただその中でも、幼稚園・保育園等や小学校における共通の認識として、どういう子どもを育てようとしているかが議論されるべきである。

また、幼稚園・保育園等で育てた子どもが小学校でどう活躍するのかを考えていくべきである。保護者は、「小学校1年生の4月に困らないように」という思いが強いが、実際は、小学校で活躍する力、例えば主体的に取り組む力や、友達と意見を出し合いながら授業を進めていくような場合のキーパーソンになるための力等を、幼児期にはどう育てていくかが大切であり、小学校もこれらを踏まえて授業を少しずつ変えていくことが大事である。スタートカリキュラムの取組が始まり、小学校においてもじわじわと幼児期の子ども

の理解が進んでいる。このことは、不登校など子どもの様々な問題についても関係があり、家庭環境も踏まえながら乳幼児期の子どもをきちんと育てていくことが小学校以上の教育にとっても大きな意味のあることである。個々の子どもについての話し合いをベースにしながら、乳幼児期の教育と小学校以上の教育でお互いにどう理解し合えるかということが大切だと思う。

コロナ禍における様々な対応の中で、乳幼児期の教育と小学校以降の教育とは世の中で違う扱いを受けていると感じて納得できない部分があった。幼稚園・保育園等も子どもが育つための教育をしている場所であるのに、「子どもを預かる場所」の位置付けが強くなったのではないかと感じている。小学校では「子どもが育つために」という視点で議論されるが、幼稚園・保育園等に関しては、保護者が働いているということが優先されたり、それぞれの園同士が園児獲得競争になったりする中で、乳幼児期の子どもが育つために何が必要なのかという議論がなされていないことが課題だと感じている。乳幼児期の子どもがきちんと育つことが小学校以降の教育にとっても大切だということを議論しておかないと、例えば9月入学が議論された時のように、幼児期の教育をあまり重要視せず、子どもの育ちについての議論はなく、少しでも早く入学させればよいということになってしまうのではないと思う。

一人一人の子どもの育ちが大切であり、それが子どもたちの将来の幸せのためになるのだから、例えば広島市における幼保小接続の取組がどうなっていくかというところは、きちんと押さえておいた方がよい。学習指導要領や幼稚園教育要領・保育所保育指針等が新しくなったものの、これまでのように進めていけるわけではないということが、コロナ禍において明らかになったと思っている。

○ いろいろな場面で、乳幼児期の教育、幼児期の教育から小学校教育への接続、小学校以降の教育などの重要性が論じられているが、本当にきちんとやってきたのか、社会全体としてどうであったのかと思う。また、コロナ禍でいろいろな事が明らかになる中で、幼児教育や保育に関する備えや考え方などが、きちんと捉えられていなかったのではないかと感じている。

● 広島市では、令和2年度に幼保小連携推進園を2園指定し、小学校教員2名を推進園に派遣している。この2名は幼稚園へ出勤し、幼稚園を中心として業務をしている。この取組は、子どもの学びと育ちを幼稚園から小学校にいかにつなげていくかということ小学校教員が学ぶためである。「幼稚園へ行こう週間」で、幼稚園の様子を見る機会はあるが、それだけでは分からない部分もあるので、小学校教員が幼稚園で保育の様子を見たり保育を実践したりすることで、何かを得てもらうことを目的に、2年間かけて行うものである。

この2名は、小学校と幼稚園を行き来しながら、小学校では1年生の様子を見るとともに、幼稚園では5歳児の保育を行っている。その中で、「小学校1年生はゼロの状態ではない」ということを確信したようである。幼稚園では、子どもが遊びや生活の中で環境を通して主体的に学んでいるという様子や、子ども同士で工夫し切磋琢磨しながら遊んでいる様子などを見て、それらを小学校での学びにつなげていかななくてはならないと感じているようである。このことを更に意義あるものにするため、この小学校教員が幼稚園で何を感じ、何をつなぐべきかと思ったのかを伝える場として、令和3年1月に、校種や公立・私立を問わず、教員向けに研修会を開催する予定である。この2名の教員が学んだ、「子どもの学びと育ちをつなぐ」ということのための正しい理解を実践に生かすために、小学校へ戻った際には1年生の担任として学びと育ちをつなぐ役割を果たしてもらいたいと思う。

○ 全ての小学校の教員にこうした取組はできないと思うが、限られた人数で行うことにも意味がある。子どもたちの姿を外から見ているだけでは見えない部分もあり、園の中に入って共に生活をするからこそ見える部分がある。そういった見え方のベクトルをもつことで、実感をもって伝えることができるのだと思う。今は少ない人数だが、その小学校教員の経験や学びを全市に広げていくことが大切だと思う。

- この夏に小学校教員に園の様子を見てもらう機会があった。小学校との連携は5歳児だけと捉えられがちだが、0歳児の遊びの中にも学びがあり、0歳、1歳、2歳の姿から就学前の5歳児につながるということを説明しながら、各保育室の様子を見てもらい、具体的に乳児の遊びの中の学びの姿を捉えて伝えた。実際の遊びの場面を見てもらうことで、どの部分が学びなのかが実感として伝わり、理解されたようであった。一部の取組にとどめずに、各小学校区の保育園でこうした交流をもっとしっかりと行い、実際に保育の様子を見てもらった小学校教員には、小学校でしっかりと発信してほしい。
- コロナ禍で、乳幼児の保育や教育は危機的な状況に置かれていて大きな分かれ道にあるのではないかと、乳幼児期はいわゆる小学校以降の教育で大切にしている点とは別の力学で動いているのではないかと、ということを感じている。したがって、幼児教育・保育の関係者や社会に向けてしっかりと乳幼児期の教育・保育の重要性を発信していかないと、違う方向へ動いてしまうのではないかと危惧している。本当に大切なことは、現場にあるので、それを一緒に考えていけるとよい。
- 小学校の教員が幼稚園での実践を経験して得た成果を市全体に広めることは、市立幼稚園の役目であると思う。特に小学校教員を受け入れている園の園長は、幼稚園が小学校に子どもの学びと育ちをつないでいく役目は大きいと感じている。

これまで、幼保小連携や幼保小接続は大切だと思っていたが、小学校や保育園のことにあまり立ち入ることができず、それぞれが自分の目の前の子どもを育てることに精一杯になっていた。今後は、そこから脱却して、お互い協力していくことが大切だと感じている。

一方で、「逆転現象」が未だに指摘されている。幼稚園の年長児はいろいろな事ができるようになっているのに、小学校に行ったら何もできないように扱われる。こうしたことは、以前から指摘されているが変わらないのはなぜか、ということを考えていくべきである。また、幼稚園に来た方から、「チャイムは鳴らないのか。」、「今は何時間目か。」といったことを聞かれることがある。幼稚園、保育園、小学校の違いを認識した上で共通項を見つけることが大切であると感じている。
- 乳幼児期は「抱っこ」が大切だということを、乳幼児期の保育に関わる立場にある者が、果たしてどこまで言えるのか、ということが気になっている。小学校以降ではコロナ対策でソーシャルディスタンスが徹底されている。一方で、乳幼児期の子どもにとっては、特に、「あなたが大事な存在だ」ということを伝える手段として「抱っこ」は一つの象徴であり、大きな意味がある。このことを、コロナ禍にあって、関係者は、どこまで発信することができたのか、子どもが育つために必要なことにどのように取り組むことができるのか、という葛藤がある。

今年度は6月から開始した幼稚園が多い中で、次年度、小学校はどのように受け入れてくれるのだろうかと思う。子どもには園等で経験させるべき大事なことがある一方で、今年度は経験させられなかったこともあり、こうしたことについて園等や小学校でも葛藤しながら取り組むのであればよい。しかし、コロナ対策を優先し過ぎていると、子どもが不安定になった時に、保育者や教員がそれを本当に支えることができるのかと思う。幼稚園、保育園、小学校の関係者が「子どもが育つとはどういうことか」、「子どもにとって必要なことは何か」を考えるような研修の仕組みの検討などを行わなくてはならないと思う。

教育現場では、6月頃から子どもの受入れを少しずつ行ったことで、うまくいった部分もある。そもそも1クラスの数も多く先生が忙し過ぎるのではないかと感じているが、コロナ禍で少人数ずつの受け入れを行ったことから、子どもに丁寧に関わることができ、子どもは「自分のことを分かってもらっている」と安心して過ごすことができたのではないと思う。

子ども一人一人を大切にするとはいどういうことかを改めて考えてもよい。30人学級では多すぎる。園の文化に慣れさせるということではなく、育ちを大事にするという原点に戻って議論をしてもよいのではないかと。

● 資料1「4 乳幼児教育保育支援センターの支援」の説明

- 「小学校教員が幼児期から児童期の発達と学習の流れを捉えられるように」ということで整理している。小学校との接続という、3, 4, 5歳と捉えがちだが、自己肯定感のベースには生後6か月頃からの愛着関係が重要であり、その頃から教育は始まっている。「幼児期から児童期の」という表現は、「0歳から児童期の」と修正し、小学校教員にもそのように理解してほしい。
- 自己肯定感の基礎となるものは、小学校との接続期に小学校1年生だけにつながるものではなく、生涯にわたってつないでいくものであるため、0歳児からのことも含めて整理するとよい。
- 小学校教員を幼稚園へ派遣している推進園の取組はとても画期的な取組だと思う。この取組をどう広げていくのか、今後は派遣する人数をもっと増やすのか、また、この2名が研究して得られたものをどうするのか、こうしたことが重要だと思う。研修会も一つの方法だと思うが、もっと多くの小学校教員が園へ出掛けていくことができる研修システムが作れるとよいのではないかと。センターの役割ではないかもしれないが、研修の一環としてそういうことができるようになればよいと思う。単に連携というだけではなく、小学校教員に乳幼児期の教育・保育の実態を知ってもらうことが、小学校教育につながると思う。以前は小学校教員に対して企業研修もあったが、それに類するものとして、今後は小学校教員が必ず幼稚園や保育園で研修を受けるとすることも考えられる。免許更新講習でそのようなメニューを検討することなども必要かもしれない。免許更新講習については、大学関係者の検討課題となるであろう。この推進園の取組のような経験者をどう増やすのか、研修の結果をどのように全市に広げていくのかは、重要な課題であると思う。
- 派遣教員が5歳児の保育で経験したことを生かすため、次年度（取組2年目）は、派遣教員が小学校1年生のスタートカリキュラムの実践に関わっていく時間を増やすことを考えている。さらに、3年目には、小学1年生の担任として小学校へ戻り、1年生の関係者全員に成果を波及させていきたいと考えている。そのため、この派遣教員が幼児教育について感じたことや小学校につないでいくべきこととして大事であると感じたこと等についての成果や課題等を整理していきたい。

また、小学校教員には幼稚園教諭の免許を有する者がいるので、今後もこの取組を継続していきたいと考えている。市立幼稚園と市立小学校は、往来が容易な立地であることも多いので、小学校と幼稚園でどんな子どもの姿を目指すかということについて、こうした教員には、キーパーソンとなって繋いでいく役目を担ってもらいたい。
- これらの取組に関するシステムを構築することや取組をマネジメントするのは、乳幼児教育保育支援センターよりも、教育委員会が主体となると考えている。一方、こうした取組の成果を発信することや、取組をつなぐよう支援するという部分で、バックアップするのが乳幼児教育保育支援センターであると考えている。教育委員会では、どうしても市立の幼稚園と小学校のかかわりが中心となるが、乳幼児教育保育支援センターが関わることで、保育園や私立園ともつながっていくよう、この取組が広島市全体に波及していくための工夫をしていきたい。
- 支援の対象として、障害のある子どもや病児の保育を行う施設もあることを考慮して整理してほしい。小学校は全ての子どもが通うが、就学前の施設には、幼稚園、保育園、認定こども園、小規模保育事業所、事業所内保育事業所、認可外保育事業所のほかにも、様々な施設がある。
- 小学校教員の派遣が市立幼稚園に限られるようであるが、市立幼稚園は4歳からの保育を行っている園がほとんどである。0歳児からの教育が大切であることを踏まえて、社会福祉法人が運営する保育園などへの派遣も検討の余地があると思う。県教育委員

会は実施しているようである。

- 昨年度、全ての小学校でスタートカリキュラムを作成した際、幼稚園はアプローチカリキュラムの部分で関わってきた。今年度からのスタートカリキュラムの実施に当たっては、コロナ禍にあり、前半は難しい点もあったと思うが、スタートカリキュラムに対して、小学校での教員の意識や活用はどの程度進んでいるのだろうか。
- 入学当初の子どもの姿としては、教科学習へも十分適応してスムーズに接続できている様子が見られる。
スタートカリキュラムの作成過程には、課題があると考えている。幼稚園・保育園等と一緒に作成するべきだとは思いますが、日程等の調整がつかず小学校から一方的に伝える形になってしまう部分がある。じっくり時間をかけて、幼稚園・保育園等とともに作成していくべきだと思う。
- 昨年度、スタートカリキュラムを作成する際に、小学校と幼稚園の教員で、乳幼児教育保育アドバイザーによる研修を受けた。その際、子どもが自己肯定感を持つことが大切であるということで両者の理解が一致し、スタートカリキュラム作成を効果的に進めることができた。小学校教員に、幼稚園での子どもの生活をしっかりと見てもらい、その様子にどのような意味があるのか、子どもの姿を中心に話ができる時間があることは大変有意義なものであった。
- スタートカリキュラムについては、気になっていることが3点ある。
1点目として、カリキュラムを作成することに重点を置きすぎ、最も重要であるカリキュラムをどう実践するかということにつながっていないのではないかとということである。実践につながるようなものを作ることが必要である。
2点目は、スタートカリキュラムは、計画通りに実践することがよいのではなくて、目の前の子どもの状況をキャッチして、カリキュラムの考え方を生かしながら実践していくことが必要であり、そのことを改めて共有していかなくてはならないということである。
3点目は、カリキュラムは、子どもが乳幼児期にどのように育ってきたのかを踏まえたカリキュラムにしなければいけないということである。カリキュラムを作成する小学校教員は、幼稚園や保育園での子どもの姿が分からないのだから、幼稚園や保育園との連携を通じて、子どもの姿やその意味を捉えることが大切である。
- 目の前の子どもに対してどうするかという意味では、コロナ禍で、特に学校や幼稚園・保育園等の力量が問われている。この状況下にある子どもたちに対して何ができるかということを考えていくことがとても大切である。親子関係がうまくいっていない子どもや、休園中に家の中でゲームばかりしていた子どもなどが、園が再開されて以降、人との関係をどのように学ぶことができているのだろうかと思う。来年4月に小学校に入る子どもは、今年度当初、幼稚園・保育園等での経験が少ないことから、人との関係づくりや意欲、粘り強さ等の育ちが、これまでの子どもたちと違う。経験できていないことで育っていない部分を今後育てていくためにはどうすることが必要なのか、小学校へどうつないでいくのか、もっと議論されるべきである。スタートカリキュラムではそうした点でも、保育者と小学校教員が連携しながら改善していくことが必要であるとともに、小学校はこれらの事情を踏まえて子どもを丁寧に受け止めることが重要であり、柔軟に対応しながら小学校教育への接続ができるとよいと思う。
広島市で、乳幼児教育保育支援センターが教育委員会にあることは大きな意味があると思う。幼保小接続では、保育者と教員がお互いの顔が見えた上で、研修やモデル事業の実施、冊子や事例集の作成、アドバイザーの派遣等、よいものが広がっていく仕組みができているのがよいと思う。